

社会思想史学会第 47 回（2022 年度）大会

セッション B「戦後思想再考——《始まりを問い質す》その 2」実施報告

2010 年 10 月の第 35 回大会にスタートした連続セッション「戦後思想再考」は、オンライン開催となった第 46 回大会より、あらためて戦後思想の《始まりを問い質す》試みにシリーズで取り組むこととした。2 回目となる今回は、一本のメイン報告に一人がコメントした後、議論を会場参加者に開くという趣向を凝らしている。

今回のセッションの基調となる中野敏男報告は、「戦後論壇」の〈始まり〉を問うという仕方で、前回より着手された本セッションの共同作業を引き継いだ。中心的に検討されたのは、日本敗戦の翌年である 1946 年の年頭に創刊された雑誌『世界』の初期号であり、それはこの新しい雑誌が組織した議論の形を通して「戦後論壇」と言われる言説空間の特質を考えようという試みであった。

その『世界』の検討に先立って中野報告はまず「ポツダム宣言」を取り上げ、そこに「日本国国民が自由に表明する意思に従って平和的傾向を有し、かつ責任ある政府が樹立されたときには、連合国の占領軍は、直ちに日本国より撤収する」と明記されており、それが「戦後日本」の言説に政治形態の帰趨を委ねた面があることを指摘した。そしてつぎに、これまで「天皇の人間宣言」と理解されている昭和天皇の年頭詔書を取り上げて検討し、それが、冒頭から明治天皇による「五ヶ条の誓文」を宣揚していて、それにより天皇制と民主主義への志向とが矛盾せず「戦後」にも天皇の統治が続けられると、天皇の方から宣言する趣旨の文書であったことを確認した。これらによって「戦後論壇」の成立するステージの設定が先行してなされていたのである。

その確認の上で『世界』の初期号に立ち入ると、とりわけその創刊号の諸論文においてそれぞれ天皇統治の伝統が擁護されており、それが民主主義と接合するという議論がそこで意識的に組織されていることがよく分かる。この『世界』という雑誌にはその 4 月号に津田左右吉による「建国の事情と万世一系の思想」が掲載されて、それが天皇制の擁護を語っているわけであるが、それだけにとどまらず初期号の全体が、天皇制と民主主義の両立する政治形態に向かう論議空間を組織するべく作られていたのである。そうであればこそ、天皇制に反対すると目された共産党と朝鮮人たちの議論はそこから慎重に排除されており、この論議空間はそもそも国体の護持と植民地主義批判の排除に志向していたと認めなければならない。象徴天皇制に落ち着いた日本国憲法の制定は大日本帝国憲法の改正として国会審議が始まるが、その提案者たる日本政府を代表して国会答弁に立った吉田茂首相は、ここでも「五ヶ条の誓文」を持ち出しつつ「日本国は民主主義であり、「デモクラシー」そのものであり、あえて君権政治とか、あるいは圧制政治の国体でなかつたことは明瞭であります」と主張している。この議論はまさに、『世界』により設置された以上の様

な「戦後論壇」を基盤に成立していた、と中野報告はまとめられている。

続いて三島憲一会員は、天皇の年頭詔書、いわゆる人間宣言の文体のもつ権威主義的姿勢、および当時この文書でも、また『世界』そのほかでも格調高く歌われていた「文化と教養」の言葉の問題性の二点に焦点を絞ったコメントを加えた。

天皇の「人間宣言」なる文章のなかの例えば「朕は爾等国民と共に在り。常に利害を同じうし休戚を分かたんと欲す。朕と爾等国民との間の紐帯は」という表現そのものに権威主義は明らかである。また「文化」も「教養」もそのつどの体制への批判のポテンシャルを持っていたはずだが、もうひとつの面、つまり体制の維持と擁護、反乱的メンタリティを文化によって調教する面がこうした一連の議論の中に色濃く現れている。市民文化の野蛮への転換を論じた『啓蒙の弁証法』の知的背景とは真逆ではなかろうか。太古以来とされる天皇の承認とヨーロッパ市民文化の崇拝が共在している事態は何を物語るのだろうか？

こうした議論に比べれば、武田泰淳（例えば「ひかりごけ」）、小島信夫（「英語教師」）、大岡昇平（『レイテ戦記』）、太宰治（『斜陽』には、ローザ・ルクセンブルクが出てくる）などの戦後文学には、怪しげなヨーロッパ市民文化の崇拝は薄い。こう三島は評価している。

その後、会場に結集した延べ 14 名の間で、報告者およびコメントータとの質疑応答を繰り広げた。質問くださった野原慎司（東京大学経済学部）および庄司武史（東京都立大学人文社会学部）の両会員に対して、司会の川本隆史は連続セッションのコアメンバーが続けている『世界』創刊号からの「つぶし読み」研究会——同誌の表紙から編集後記にいたるほぼ全頁のスキャン PDF を、目次にそって「しらみつぶし」に読み合わせる Zoom ミーティング（三島氏のネーミング）——を案内した。これに応じて野原会員が直近の 10 月の会より参加され、お仲間も誘ってくださっている。

こうした「つぶし読み」作業にご関心を抱かれた会員は、学会会員限定ページの電子名簿に記された川本のメールアドレスまで、お問い合わせ願いたい。

（セッション世話人：初見基）